

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## アルカラ大学における大学教育の理念と実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 竜仁, NOMURA, Ryujin メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2300">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2300</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# アルカラ大学<sup>1</sup>における大学教育の理念と実践<sup>2</sup>

野村 竜仁

## 1. ルネサンス期スペインにおける大学設立の背景

15 世紀末から 16 世紀にかけて、スペインでは総合学校 (Estudio general) など高等教育を実施する学校の設立が相次ぎ、やがてそれらは大学として整備されてゆく<sup>3</sup>。本稿で取り上げるアルカラ大学も、この時代に生まれた大学の一つである。

この時期に多くの大学が設立された背景の一つとして、大学をめぐるナショナリズム的な気運の高まりを挙げることができよう。そうした気運を醸成した要因のひとつとして、人文主義者たちの活動があったとされる。中世の時代から、大学は超領域的な学府としての性格を有するとともに、知を独占する機関としても機能していた。そうした役割を担うための後ろ盾となっていたのが教会権力であり、そのための手段がラテン語であった<sup>4</sup>。人文主義者たちは、もともとは大学に象徴される知の牙城の住人であり、一種のエリート階級でもある。ただし彼らが標榜したラテン語の純化は、結果的に前述のような機運を高めることになる。

人文主義者たちは古典期のラテン語を規範とし、中世の時代に共通語として用いられていた、彼らが言うところの「純粹でない」ラテン語を批判した。この純粹さの希求によって言語としての硬化が生じ、ラテン語は今日のような死語としての道を歩みはじめる<sup>5</sup>。そうしたラテン語に代わって、人文主義者は論考や教育のために俗語を用いることを称揚し、そのためのモデルの構築を目指す<sup>6</sup>。こうしてラテン語の権威に陰りが見えはじめるとともに、教会権力にも動揺が生じたことで、知の王国たる大学は後ろ盾を失い、その超領域的な性格を

<sup>1</sup> 本稿で取り上げる大学は、マドリード・コンプルテンセ大学の前身となる、枢機卿シスネロスによって創立されたアルカラ大学である。

<sup>2</sup> 本稿は、平成 28 年度 JSPS 科学研究費補助金 (基盤研究 C 「16 世紀スペインにおける人文主義教育思想の展開と実践」 課題番号 15K02089) による成果の一部である。

<sup>3</sup> Pérez, 2013, p. 72.

<sup>4</sup> 山本義隆, 2007, p. 569.

<sup>5</sup> Pérez, 2013, p. 81.

<sup>6</sup> 岡本, 2015, p. 61.

変化させ、それぞれの地域に複数の大学が生まれる時代を迎えることとなる<sup>7</sup>。

## 2. アルカラ大学の設立

### 2.1 設立前史

アルカラ・デ・エナーレスにおいて高等教育機関を設立しようとする動きは、中世においてその端緒が開かれた。1293年、カスティーリヤの王であったサンチョ4世が、アルカラに *Estudio de Escuelas Generales* と呼ばれる学府の設立を承認する勅許状を出している<sup>8</sup>。ただしこの認可によって、ただちに大学設立に向けた動きが見られたわけではなかった。

のちの大学につながる教育機関が、その創立に向けて実際に動き出すのは、1446年にトレド大司教となったアルフォンソ・カリーリョ・デ・アクーニャの頃からであった<sup>9</sup>。1459年、時の教皇ピウス2世から3つの講座を設けるための教書を得たカリーリョ・デ・アクーニャは、講座を置く学府の設立を構想する。この計画を実現させることになるのが、カリーリョ・デ・アクーニャの二代後にトレド大司教となった、フランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロスである。シスネロスは教皇アレクサンデル6世からの教書を得て、1499年にサン・イルデフォンソ学寮を誕生させる<sup>10</sup>。このサン・イルデフォンソ学寮を中核とする形で、アルカラ大学はシスネロスの構想に基づき、他の学寮や教育制度などを整備してゆく。

### 2.2 シスネロスによる大学設立の背景

こうして設立されたアルカラ大学は、多言語対照聖書とともにシスネロスが行ったルネサンス期のスペインを象徴する文化的事業であった。これらの事業を推進し、また摂政として政治にも携わったシスネロスだが、その素養はあくまでも宗教的なものであったとされる<sup>11</sup>。そうした宗教的な情熱ゆえに、初代グラナダ大司教エルナンド・デ・タラベラによる異教徒に対する穏やかな改宗政策に反対し、強制的な改宗や禁書を断行する。またアフリカ北岸のオランへの軍事的な侵攻なども実施する。上記の文化的事業は、政治的な断行と同じく宗教的な情熱によるものであり、目指すところは宗教的な改革にあったと言えよう。そのため大学設立も、当時の人文主義の成果などを活用しつつ、キリス

<sup>7</sup> Pérez, 2013, p. 82.

<sup>8</sup> 川成, 2011, p. 743; Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá, 1999, p. 47.

<sup>9</sup> Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá, 1999, p. 47.

<sup>10</sup> Real Academia de la Historia, 2009, p. 730.

<sup>11</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, pp. 96-97.

ト教の古典の復権と、聖職者の刷新を主たる目的とするものであった<sup>12</sup>。

シスネロスはフランシスコ会の修道士であり、その宗教的な情熱は、まず彼自身が所属する修道会の改革運動として発露する<sup>13</sup>。この時代のフランシスコ会は原初の姿への回帰を呼びかける厳格派と、現状維持を求める修道院派の争いがあり、シスネロスは厳格派に与する形で、修道士に対して現世的な富を顧みない清廉さを求めた。みずからが属する修道会の改革を進めるとともに、シスネロスは当時のキリスト教徒のあいだで見られた様々な不和を解消するため、新たな信仰のあり方を模索してゆく。

新たな信仰が希求された一つの要因として、新しい時代の到来という当時の社会における気運の高まりを挙げることができるだろう<sup>14</sup>。フィオーレのヨアキムに連なる思想的風土を持つフランシスコ会は、そうした時勢に呼応し、改革運動を活発化させる。シスネロスの念頭にも、新しい時代にふさわしい新たな人間、新たなキリスト教徒の育成があったされる<sup>15</sup>。人心が動揺する時代に、宗教者には信者を導く導師としての役割が求められ、それを担うことを期待されたのが人文主義者、とりわけクリスチャン・ヒューマニストと呼ばれる人々であった。

イタリアとは異なりスペインでは、人文主義者は宗教的な導師として位置づけられてゆく<sup>16</sup>。その典型とも言えるがエラスムスであり、スペインにおけるエラスムス主義の運動にも、そうした側面を見ることができる。また活版印刷術の普及と相まって、人文主義者たちは古典語を解さない人間に向けたテキストを著すことも期待された<sup>17</sup>。アルコルの助祭長として知られるアロンソ・フェルナンデス・デ・マドリッドによって、エラスムスの『エンキリディオン』がスペイン語に訳されて世に出たことなども、そうした例の一つと言えるだろう<sup>18</sup>。

### 2.3 新たな神学の府として

シスネロスによるキリスト教の改革運動の一環として、アルカラ大学が設立される。つまりその設立の理念には宗教的な要請が含まれていたと言える。1495年、トレド大司教となったシスネロスには当初から新たな教育機関を設立する意図があり、そのため早くから人材および施設の確保に動き出していた<sup>19</sup>。1498

<sup>12</sup> Bataillon, 1982, p. 10.

<sup>13</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 508.

<sup>14</sup> Pérez, 1986, pp. 324-326; *Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá*, 1999, p. 19.

<sup>15</sup> *Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá*, 1999, p. 55.

<sup>16</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, pp. 99, 102.

<sup>17</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 102.

<sup>18</sup> *Erasmus en España*, 2002, p. 268.

<sup>19</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, pp. 58-59.

年にはローマ教皇庁に新たな学府の設立を申請し、1499年に大学としての認可を受け、中核となるサン・イルデフォンソ学寮が1508年にその活動を開始する<sup>20</sup>。

アルカラ大学の特徴は、前述のような時流のなかで神学の刷新を目指して創設された点にあり、講座の設置にもそうした意図が反映されている。この時代、サラマンカ大学やバリャドリッド大学など中世からつづく伝統を有するスペインの大学では、官吏を要請するための世俗法の講座が重要な柱となっていた<sup>21</sup>。これに対してアルカラ大学では、同分野において両大学と競合せず、また世俗法を修めた場合には世俗的な利益とのつながりが生じる可能性が高いこともあり<sup>22</sup>、教会法のみが講じられることとなる<sup>23</sup>。

アルカラ大学が目指したのは、キリスト教の伝統を継承し、司牧としての職務を全うするために必要な、十分な知識を備えた聖職者の養成であったと言える。言い換えれば、神学的な真理の探究ではなく、神学についてのより実践的な教育が重視されたことになる。そうした目的のため、当時の神学における三つの主要な講座、いわゆるトマス派、スコトゥス派、唯名論派の理論が、その優劣を論じられることなく、等しく講じられていた<sup>24</sup>。

こうした神学理論の教授とともに重視されたのが聖書学であり、その基礎とされた人文学の素養と、古典語に関する知識の涵養が図られた<sup>25</sup>。新しい人間、新しいキリスト教徒の育成には導師としての聖職者が必要であり、魂を導くには知識の源泉に戻ることが不可欠であるというのが、シスネロスの考えであった<sup>26</sup>。ただし聖書について講じる場合も、宗教改革が標榜したような個人としての読解を意図したものではなく、前述のような聖職者としての使命を果たすことを目的としたものであったと言える。

### 3. アルカラ大学における教育

#### 3.1 学寮と教育課程

前述のようにアルカラ大学は、サン・イルデフォンソ学寮 (Colegio Mayor) を中核として構想された組織であり<sup>27</sup>、この学寮が他の学寮 (Colegios Menores) および大学を統括する形で整備されてゆく。大学の本部ともいべきサン・イルデフォンソ学寮には学芸、教会法、神学の三つの講座が置かれ、のちに医学

<sup>20</sup> Gil García, 2003, p. 89.

<sup>21</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 542.

<sup>22</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 508.

<sup>23</sup> Ruiz García, 2011, p. 187.

<sup>24</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 509.

<sup>25</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, pp. 542, 544.

<sup>26</sup> *Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá*, 1999, p. 55.

<sup>27</sup> Ruiz García, 2011, p. 104.

が加えられた<sup>28</sup>。

シスネロスの構想では、さらに 18 の学寮を設立することになっていたが、彼の生前に実現したのは 7 学寮にとどまる。サン・エウヘニオ学寮、サン・イシドロ学寮、サンタ・バルビナ学寮、サンタ・カタリナ学寮、「神の母」学寮、サン・ペドロ/サン・パブロ学寮と、サン・ルカス/サン・ニコラス病院である<sup>29</sup>。三つの古典語を講じたことで知られているサン・ヘロニモ学寮は、シスネロスの死後の 1528 年に設立されている。ただし構想自体はシスネロスの計画に沿ったものであったとされる<sup>30</sup>。その他にもサン・レアンドロ学寮や、それぞれの修道会などによる学寮なども設けられてゆく<sup>31</sup>。

新たな大学を設立するにあたり、シスネロスにとって主要な手本となったのがサラマンカ大学とパリ大学であった。前者は大学の機構と運営の面で、後者は教育の面でのアルカラ大学のモデルだが、その一方で前述のように世俗法の講座は置かれず、またサン・イルデフォンソ学寮主導の下で初等課程から専門課程までの教育を行うという独自性も有していた<sup>32</sup>。課程の区分には三段階あり、大枠としては初等課程において古典語の文法など言語的素養を身につけ、中等課程においては自由学芸を修め、その後神学などを学ぶ専門課程へと進む<sup>33</sup>。初等課程において言語的素養が重視されている点は、文献学的な知識をすべての学問の基礎として位置づけていることのあらわれとも言えよう。

前述の 7 学寮のうち、サン・ルカス/サン・ニコラス病院を除く 6 学寮には、課程の区分と連動する形でそれぞれ担うべき学問領域が定められていた。初等課程を担ったのがサン・エウヘニオ学寮とサン・イシドロ学寮であり<sup>34</sup>、さらにもう一つ、サン・レアンドロ学寮も 1538 年に設立されるが、その活動期間は長くはなかったとされる。初等課程の学寮において、学生は 8 歳以降に学び始める。3 年間でラテン語の学習に当て、その後は必須ではないものの、2 年間ギリシャ語を学ぶことも可能であった<sup>35</sup>。初年次の教材として、ネブリハの『ラテン語入門』やカトーの『箴言集』、エラスムスの『格言集』などが用いられている。

言語的素養を培ったのち、自由学芸の課程へ進むことになる。その際、学資を持たない者のために設けられたのがサンタ・バルビナやサンタ・カタリナと

<sup>28</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 120.

<sup>29</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 120.

<sup>30</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 128.

<sup>31</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, pp. 129-135.

<sup>32</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 139; González Navarro, 1999, p. 19.

<sup>33</sup> Bataillon, 1982, p. 13.

<sup>34</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 140.

<sup>35</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 140.

いった学寮であり、またフランシスコ会士のためのサン・ペドロ/サン・パブロ学寮であった。学芸課程は4年間で、その内容は当時の他の大学と比べて特殊なものではなかった。初年度はペトルス・ヒスパヌスの『論理学綱要』を学び<sup>36</sup>、つづく年度においてポルピュリオスの『範疇論入門』などに基づき論理学が、さらに自然哲学などが講じられ、最終年度が形而上学という課程になっていた<sup>37</sup>。最初の3年間の課程を終えたものは学芸課程前期修了者 (bachiller) として、他の学寮で学ぶ資格が与えられ、また4年目を終えて試験に合格したものには、学芸課程の学士号 (licenciado) の資格が与えられた<sup>38</sup>。

この4年間の課程を終えたものが、大学の専門課程としての講座において教会法、神学、あるいは医学を修めることになる<sup>39</sup>。神学あるいは医学を学ぶ、学資を持たない学生のために設けられたのが、「神の母」学寮であった<sup>40</sup>。学芸課程前期修了者はこの学寮において学ぶことができ、神学の場合は三つの講座、すなわちトマス派、スコトゥス派、唯名論派のいずれかの理論を4年間学ぶ。さらに2年間、聖書とペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』を学ぶことが義務づけられた。6年間の課程を終えて試験に合格した者は神学課程前期修了者 (bachiller) として認定された<sup>41</sup>。学士号 (licenciado) を取得するためには、さらに2年間、審査官を前にしての面談講義を含めて、みずから『命題集』や聖書を講じ、そのうえで説教や問答など聖職者としての実績を積む必要があった。またこうした研鑽以外に、正当な嫡出子であることや、司祭としての資格を有し、品行方正であることなども求められた<sup>42</sup>。

### 3.2 新たな神学への取り組み①：唯名論

すでに述べたように、アルカラ大学創立の目的は新たな神学の府としての役割を担うことであった。そのため前述のような課程を設け、直接聖書のテキストに当たる能力を涵養するとともに<sup>43</sup>、神学理論にも通ずることができるよう、神学における三つの道とされた、トマス派、スコトゥス派、唯名論派のそれぞれの講座が神学の課程に置かれた<sup>44</sup>。この神学課程のうち、特筆すべきは唯名論の導入である<sup>45</sup>。

<sup>36</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 510.

<sup>37</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 141.

<sup>38</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 123.

<sup>39</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 142.

<sup>40</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 125.

<sup>41</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 125.

<sup>42</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, pp. 125, 145-146.

<sup>43</sup> Bataillon, 1982, p. 13.

<sup>44</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 145.

<sup>45</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 511.

唯名論は当時最先端の神学理論とされ、それを講じるために同分野の中心地であったパリ大学から、ミゲル・パルドやペドロ・サンチェス・シルエロといった、唯名論に精通したスペイン人の講師がアルカラ大学に招聘された。ちなみにサラマンカ大学でも1508年に唯名論の講座が設けられたが、それでも同大学はアルカラ大学とは異なりスコラの伝統が強く、唯名論に関してはアルカラ大学がスペインにおける拠点となる。

唯名論の導入は、古い知識と新しい知識を総覧的に提示するアルカラ大学の教育方針に基づくものであった。唯名論およびそれ以前の神学理論を等しく講じ、加えて古典語と哲学についての古今の知見を教授することにより、新たな時代にふさわしい神学教育を推進することを目指していた<sup>46</sup>。人間に関する学問にも習熟することで神学を発展させることができるとする考えは、司牧としての聖職者の育成を目指す大学の方針とも合致するものであったと言えよう。

ただし一般的には、神学の分野における唯名論の勃興は、信仰と理性の分離を促すものであった。かつては実在と結びつくとされていた言葉が、唯名論によって記号として定義され、そこから有限な理性では有限な世界しか捉えられないとする結論が導かれる。むしろアルカラ大学における唯名論の導入は、信仰と理性の分離ではなく信仰の創造的な深化を目的としたものであったが<sup>47</sup>、その一方で、当時の唯名論は論理学をもっぱらとするものであり、たとえばパラドックスをめぐる問題などの議論に終始し、日常性とは相容れないものになっていた面もある<sup>48</sup>。そうした唯名論の学問的営為は、当時においては人文主義者たちによって無意味な空論として指弾され、批判の対象となっていく。

### 3.3 新たな神学への取り組み②：人文学

人間に関する問題を視野に入れて神学の刷新を目指したアルカラ大学において、人文学が重視されたのは当然と言えるかもしれない。たとえばこの時代の医学、つまり実証的な方法論が確立される以前の医学は、ガレノスなどかつての医学者が記した文献を典拠とした学問であり、そのため人文主義者たちによる貢献も小さくはなかった。総じて古典古代の文献が知識の源泉とされ、聖書もそうした検討の対象として認識されていた。聖書には科学的、哲学的知識が含まれているという確信に基づき<sup>49</sup>、そのテキストには現実を解釈する知識が散在すると解されており、聖書を基礎とした現実の精査が可能であるとされて

<sup>46</sup> Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá, 1999, p. 57.

<sup>47</sup> Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá, 1999, p. 57.

<sup>48</sup> Historia de la Universidad de Alcalá, 2010, p. 512.

<sup>49</sup> Historia de la Universidad de Alcalá, 2010, p. 524.

いた。

前述のようにアルカラ大学では古典語の教育が重視されたが、その礎を築いた一つとして、多言語対照聖書の編纂を挙げることができよう。のちのカール五世の誕生を記念して編まれることになった多言語対照聖書は、時の権力者であったシスネロスの主導のもとで進められた事業であり、当時の第一級の人文主義者たちが集められた。1502年から人選が開始され、召集された中にはネブリハやエルナン・ヌニェス・デ・トレド、ロペス・デ・スニガ、フアン・デ・ベルガラ、デメトリオ・ドゥカス、アルフォンソ・デ・サモラ、アルフォンソ・デ・アルカラ、パブロ・コロネルなどがいた<sup>50</sup>。編纂が終わったのは1517年で、ただし教皇の認可を待つ必要があり、実際に刊行されたのは1520年であった。

多言語対照聖書とともに、アルカラ大学の人文主義的な側面を象徴するのが、三言語学寮 (Colegio Trilingüe) と呼ばれるサン・ヘロニモ学寮であろう。すでに述べたようにサン・ヘロニモ学寮の設立は1528年で、シスネロス自身は直接その設立には携わっていない。ただし構想自体はシスネロスの計画に沿ったものであったとされ<sup>51</sup>、設立の経緯については詳らかではないものの<sup>52</sup>、前述の多言語対照聖書やアルカラ大学の設立といった、シスネロスが推進した事業の成果から生まれたものであることは間違いないだろう。

三言語学寮という名前のおり、この学寮の特徴はラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語という古典語の教授にある。大学創立当初はサン・エウヘニオ学寮とサン・イシドロ学寮で講じられていたギリシャ語もこの学寮で学ぶこととなり、それぞれの言語について3年間の課程が定められていた。学生はいずれの言語を選択することも可能であり、課程の内容は、ラテン語専攻ではレトリック、雄弁術、朗唱法を学び、ギリシャ語専攻ではギリシャ語テキストのラテン語訳を、ヘブライ語専攻では聖典のテキストの翻訳を行うことが定められていた。一つの言語の課程の修了後、他の言語の課程を学ぶことも可能であり、最長で9年間の課程となる。また年中行事として、それぞれの言語による劇を行うことも課されていた。こうしたサン・ヘロニモ学寮における教育などにより、アルカラ大学では古典語に通じた聖職者が養成されていくことになる<sup>53</sup>。

#### 4. アルカラ大学と新たな釈義

以上のようにアルカラ大学では、伝統的なスコラ学のみならず人文学など当

<sup>50</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 187.

<sup>51</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 128.

<sup>52</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 218.

<sup>53</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 142.

時の最先端の知識を含めた教育課程が整備され、新しい時代にふさわしい神学の在り方が模索されていった。その柱の一つとして古典語の研究・教授が重視され、古典語と人文学の知識をもって聖書を読み解くことのできる人材が育成された。そうしたアルカラ大学での学問的営為から、聖書の釈義をめぐる新たな潮流が生み出されていく。

#### 4.1 スペインにおける聖書の釈義の伝統

アルカラ大学において、人文学の成果に基づく聖書の研究が推進された背景のひとつとして、スペイン特有の伝統があったとされる。中世から続く聖書の釈義をめぐるキリスト教徒とユダヤ教徒の関係である<sup>54</sup>。

1492年の追放令以前、スペインにおいてキリスト教徒とユダヤ教徒は長い共存の歴史を持つ。いわゆるレコンキスタの時代、キリスト教徒の中から、ユダヤ教の聖書解釈をみずからの護教的な目的のために用いようとするものがあらわれる。代表的な例として、のちのキリスト教カバラーの端緒ともされるラモン・マルティによる『信仰の短剣』(Pugio fidei)を挙げることができよう。13世紀にラモン・マルティが著したこの護教論において、キリストや三位一体などキリスト教徒にとって重要な問題の論証のために、ユダヤ教の釈義の伝統が援用された<sup>55</sup>。ルネサンス期スペインにおける新たな神学運動の中でヘブライ語の重視されたのは、そうした系譜の帰結とも言えるだろう。

前述のようにアルカラ・デ・エナーレスでは、多言語対照聖書の編纂のためにヘブライ語に通じた人材が招集された。多言語対照聖書に掲載されたヘブライ語のテキストの原典については不明な点もあるが、その中にはユダヤ人の追放以降、トレドなどの学校やシナゴグに保管されていた資料も含まれていたと考えられている<sup>56</sup>。

元々アルカラ・デ・エナーレスは、ユダヤ人共同体とのつながりが強い町でもあり、その伝統は同地がトレド大司教の所領であったことと無関係ではないだろう。レコンキスタの時代、アルカラにおけるイスラム教徒の支配を終わらせたのは、当時のトレド大司教ベルナルドであった。その功績により、カステイリーヤ王であったアルフォンソ7世は、1129年にアルカラをトレド大司教が治める土地として定める。シスネロスによるアルカラ大学の創立は、こうした歴史の中に位置づけることもできるだろう。

翻訳学派と呼ばれるグループの活動を見てもわかるように、トレドは中世か

<sup>54</sup> Fernández López, 2009, pp. 24-25.

<sup>55</sup> Wirszubski, 1989, pp. 168-169.

<sup>56</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, pp. 200-201.

らユダヤ教の知的遺産が継承されていた町であり、その影響はトレド大司教が治めるアルカラ・デ・エナーレスにも及んでいたと考えられる。キリスト教圏の中でも他の土地より寛容であったトレドの支配のもと、アルカラではユダヤ人共同体が成長し、経済的な豊かさを享受するとともに、伝統的な生業でもある医療などに従事していた<sup>57</sup>。多言語対照聖書やサン・ヘロニモ学寮などヘブライ語に関連した事業の成果は、そうした伝統を背景としたものでもあった。

継承されたユダヤ教の知的遺産の中には聖書の翻訳や釈義があり、その一部はラテン語や俗語で記されていた<sup>58</sup>。ユダヤ人たちはヘブライ語を解さないもののために聖書の翻訳にも従事しており<sup>59</sup>、その活動は中世を通して行われたが、1350年から1450年頃が最盛期とされる<sup>60</sup>。その一方で、そうした活動に対しては激しい反発もあり、資料の焚書なども行われた<sup>61</sup>。1391年にはユダヤ人の大量虐殺なども起こっているが、こうした反発は結果的に多くのコンベルソを生み、コンベルソがユダヤ教の知的遺産をキリスト教徒に伝える時代を迎えることになる<sup>62</sup>。むろんカトリック両王によるユダヤ人追放もあり、ユダヤ教の知的遺産をめぐる状況は厳しさを増してゆくが、その中にあるも伝統的な資料の一部は、サラマンカ大学や、とりわけアルカラ大学に所蔵され、焚書を免れている<sup>63</sup>。

## 4.2 アルフォンソ・デ・サモラ

アルカラ大学の書架には、上記のような資料が収蔵されていたと考えられる<sup>64</sup>。そうした資料を大学にもたらすとともに、それらを教育に活用する先鞭をつけたのが、多言対照聖書の編纂にも携わったアルフォンソ・デ・サモラであった<sup>65</sup>。

コンベルソであるアルフォンソ・デ・サモラの生涯については、詳らかでない点も多い。ヘブライ語の文法書『ヘブライ語文法入門』(Introductiones Artis Grammaticae Hebraice)の著者としても知られ<sup>66</sup>、当初はサラマンカ大学においてヘブライ語の指導を行っていたが、シスネロスの招聘により1512年にアルカラ

<sup>57</sup> Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá, 1999, p. 38.

<sup>58</sup> Fernández López, 2009, p. 30.

<sup>59</sup> Fernández López, 2009, p. 49.

<sup>60</sup> Fernández López, 2009, p. 61.

<sup>61</sup> Fernández López, 2009, p. 62.

<sup>62</sup> Fernández López, 2009, p. 67.

<sup>63</sup> Fernández López, 2009, p. 68.

<sup>64</sup> Fernández López, 2009, p. 81.

<sup>65</sup> Fernández López, 2009, p. 81.

<sup>66</sup> Perea Siller, 2013, p. 156.

大学へ赴く。そして多言語対照聖書の事業に参加するとともに<sup>67</sup>、同大学における最初のヘブライ語の教授となった<sup>68</sup>。その学問的業績はヘブライ語の指導だけではない。ペドロ・シルエロとともにヘブライ語の聖書をラテン語に訳し、アラム語による聖書のテキストの修復およびそのラテン語訳にも従事しており、さらには中世におけるユダヤ教の聖書釈義の解説や、護教論なども著している<sup>69</sup>。

このアルフォン・デ・サモラこそ、ユダヤ教由来の釈義の伝統と、人文主義の方法論をつなぐ人物であった<sup>70</sup>。彼にとって、ヘブライ語のテキストには聖書における原初の意味が秘められており、それは単純な語彙のみならずテキストのあらゆる面にかかわるものであった。聖書のテキストには恣意的な部分はなく、すべてに神の意図が隠されている。それらを読み解くため、アルフォン・デ・サモラはカバラーに代表されるユダヤ教の伝統的な釈義の方法を用いている<sup>71</sup>。

アルフォン・デ・サモラの釈義の手法は、後述するシプリアーノ・デ・ラ・ウエルガなどに継承され、アルカラ大学における新たな神学教育として一つの確立を見る<sup>72</sup>。そのための大きな基盤となったのが、アルフォン・デ・サモラ等によってもたらされたユダヤ教の知的遺産であった。時代が下り 16 世紀後半になると、そうした資料は禁書扱いとなり、閲覧が厳しく制限されることになる。しかしそのような時代になっても、シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガの指導を受けたアリアス・モンタノが、アントワープ版多言語対照聖書（*Biblia Poliglota de Amberes*）を編纂するためにアルフォンソ・デ・サモラの蔵書を参照するなど、次世代への影響はつづいていた<sup>73</sup>。

### 4.3 ディオニシオ・バスケス・デ・トレド

アルフォンソ・デ・サモラが先鞭をつけたアルカラ大学における新たな神学教育は、後述するようにシプリアーノ・デ・ラ・ウエルガによってさらなる展開を見る。その際、シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガがユダヤ教の釈義とともに活用したのが、ピコ・デラ・ミランドラ等によるキリスト教カバラー<sup>74</sup>などを含めた、フィレンツェにおけるプラトン研究の成果であった<sup>75</sup>。イタリアに端を発するこの人文主義の流れは、前述のアルフォンソ・デ・サモラのそれと

<sup>67</sup> Fernández López, 2009, p. 85.

<sup>68</sup> Fernández López, 2009, p. 84.

<sup>69</sup> Perea Siller, 2013, p. 156.

<sup>70</sup> Fernández López, 2009, pp. 82, 86.

<sup>71</sup> Perea Siller, 2013, pp. 157-158.

<sup>72</sup> Fernández López, 2009, pp. 82, 86.

<sup>73</sup> Perea Siller, 2013, p. 165.

<sup>74</sup> 山本伸一, 2015, p. 96.

<sup>75</sup> Perea Siller, 2013, pp. 165-166.

比較して護教的側面が少なく、より思弁的であるとされる<sup>76</sup>。そうした手法をシプリアーノ・デ・ラ・ウエルガに先駆けてアルカラ大学にもたらしたのが、ディオニシオ・バスケス・デ・トレドであった。

ディオニシオ・デ・バスケスの生涯も不明な点が多い。身分としてはアウグスティヌス会士であり、ガルパール・モロチョ・ガヨによれば、25歳の時にバリャドリートの異端審問所に訴追され、ローマへ逃亡している。後年、エラスムス主義者として批判されることになるが、青年期においてすでにそうした批判を受けていたかどうかは定かではない<sup>77</sup>。

ローマでは1510年から1513年にかけて聖書の研究に従事し、所属するアウグスティヌス会において、聖書を講じる学僧としての役割を担っていた。この時期に、やはりアウグスティヌス会の修道士であり、当時ローマに滞在していたマルティン・ルターが彼の講義を聞いていた可能性も指摘されている<sup>78</sup>。ルターとの関係はそれだけにとどまらず、95ヶ条の論題が発表された翌年の1518年、ディオニシオ・デ・バスケスはケルン管区の巡察使に任命されており、その理由はルターが同管区の所属であったからともされる<sup>79</sup>。もっとも、ディオニシオ・デ・バスケスが実際に赴いたのは、同じく任命されていたカスティージャ管区であった<sup>80</sup>。

1532年から、ディオニシオ・デ・バスケスはアルカラ大学において聖書の講座を担当している<sup>81</sup>。彼の任用のために新たな講座が設けられ、また当時のアルカラ大学では4年間の任用が一般的であったのに対して、15年間の任期が定められた。当時53歳であった彼にとっては終身任用に等しいものであり、さらに居住義務なども免除されていた<sup>82</sup>。異例の厚遇は、その名声を裏づけるものと言えよう。

当時学生であったシプリアーノ・デ・ラ・ウエルガが、高名な聖書学者の講義を聞いていた可能性は高い<sup>83</sup>。ディオニシオ・デ・バスケスとシプリアーノ・デ・ラ・ウエルガは、聖書に関する知識のみならず優れた説教者としての資質なども共通しているが、等しくアルカラ大学で聖書を講じながらも、その功績は後者のほうが大きいものとなった<sup>84</sup>。これは両者の能力の差というよりも、

<sup>76</sup> Perea Siller, 2013, p. 155.

<sup>77</sup> Morocho Gayo, 1991, pp. 875-876, 879.

<sup>78</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 876.

<sup>79</sup> Morocho Gayo, 1991, pp. 867-877.

<sup>80</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 877.

<sup>81</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 880.

<sup>82</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 880.

<sup>83</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 883.

<sup>84</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 881.

時期によるところが大きいとされる。

ディオニシオ・デ・バスケスが講座を担当した時期は、まだサン・ヘロニモ学寮が開設されてから間もないこともあり、原文での聖書の読解は学生にとってなじみの薄い学業であった<sup>85</sup>。これに対してシプリアーノ・デ・ラ・ウエルガが講座を担当した時期は、サン・ヘロニモ学寮などによる教育的成果がすでに生み出される状況にあった<sup>86</sup>。言い換えれば、大学における新たな釈義への取り組みは、ヘブライ語を含めた古典語の習得という教育課程の充実をもって、可能となるものでもあった。

#### 4.4 シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガ

前述のように、シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガはディオニシオ・デ・バスケスがアルカラ大学で教鞭をとっていた時期に同大学で学んでいる<sup>87</sup>。さらに1548年から49年にかけてはルーヴェンに滞在してギリシャ語やヘブライ語などの古典語の習得に努めており、そうした研鑽を経て、アルカラ大学を中心にみずからが聖書について講じるようになる。

シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガの学問的営為の独創性は、*Filología poligráfica* による聖書の原典解釈と、大学の講義におけるその展開にあるとされる。*Filología poligráfica* とは、密伝の解読による文献学といった意味を持つ言葉である。*poligráfica*、つまり *poligrafia* という単語について、スペイン王立学士院編纂の辞書では、①「いかに読み解くか知りうるもののみが判読可能な、秘められた、あるいは通常とは異なるさまざまな形で記す技法」、あるいは②「そうした形で記されたテキストを説き起こす技法」<sup>88</sup>といった定義が与えられている。こうした技法をもって文献を精査する学問が *Filología poligráfica* となり、聖書を対象としてウエルガが実践するのは、②の技法となる。

聖書のテキストについて、シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガはキリスト教における釈義の伝統、プラトンに代表されるいわゆる「古代神学」の知見、さらに知悉している古典語の知識をもって、その意味を説き起こしてゆく。テキストに対して歴史的に多様な読み解きがなされてきた場合は、まず個々の読みに対して検討を加え、適当と思われるものを提示しつつも、それ以外のものにつ

<sup>85</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 882.

<sup>86</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 885.

<sup>87</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 881.

<sup>88</sup> Real Academia Española, 2014.

拙訳で、原文は以下の通り。

1. Arte de escribir por diferentes modos secretos o extraordinarios, de suerte que lo escrito no sea inteligible sino para quien pueda descifrarlo.  
2. Arte de descifrar los escritos poligráficos.

いてもしかるべき権威を認めていくのが、ウエルガが原典解釈にのぞむ際の基本的な姿勢とされる<sup>89</sup>。

シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガの著書として刊行されたものの中に、雅歌に関する注釈がある。その記述を例にとると、まずウルガタ版のテキストと、ヘブライ語の原典に基づくテキストが併記され、それぞれの意味するところが解説される。たとえば雅歌 1.2 「あなたの愛はぶどう酒よりも心地よく」<sup>90</sup>の場合、ウルガタ版では「QUIA MELIORA SUNT UBERA TUA VINO」（あなたの胸はぶどう酒よりも良い）となり、ヘブライ語のテキストに基づく「QUIA MELIORES SUNT AMORES TUI SUPER VINUM」（あなたの愛はぶどう酒よりも良い）となる。二つの文の違いは、原典のヘブライ語の「אֱהָבָה」（愛されるもの）の読み解きにある。ウエルガによれば、これが「אֱהָבָה」であれば「愛」と解釈でき、一文字抜けた「אֶבְרָחָה」であれば「胸」と解釈できる。ウルガタ版は後者の意味をとるわけだが、ウエルガは両者の是非を論じることはない。「胸」の場合は神の鷹揚さを<sup>91</sup>、「愛」の場合は神を愛することの永遠の至福を意味すると解し、違いはあるもののそれぞれの解釈を尊重し、その意味するところを併記している。

さらに「愛」としての解釈に先立ち、「愛」の語義を明確にする必要性を、プラトンを引きながら主張する<sup>92</sup>。哲学者が語るのは「地上の愛」であり、一方、神学者が語るべきは「天上の愛」として、まずその違いを峻別する。そして「ぶどう酒」という言葉が「地上の愛」を意味することを、聖書の文言やプラトンの言葉を引きながら詳述している<sup>93</sup>。テキストの文意の検討に先立ち、比喩的に用いられた言葉が意味するところを、諸学の知識をもって語っていく点もウエルガの特徴とされる<sup>94</sup>。またユダヤ教において権威とされた人物や文献、あるいはプラトン、アリストテレス、ピュタゴラスなど古代ギリシャの古典を度々援用しており、そこには異教の権威に対する憧憬を見ることもできるとされる<sup>95</sup>。こうした点は、同時代のスペインの神学者たちの多くが伝統的なスコラ学に依る中であって、ウエルガの存在が稀有なものであったことを物語っている<sup>96</sup>。

ヘブライ語の知識にしる古代ギリシャの古典への言及にしる、シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガが開陳する知識は、当時の知識人のあいだでは既知のも

<sup>89</sup> Huerga, 1991, p. XXV.

<sup>90</sup> 『聖書』, 1986, p. 1024.

<sup>91</sup> Huerga, 1991, pp. 36-37.

<sup>92</sup> Huerga, 1991, pp. 38-39.

<sup>93</sup> Huerga, 1991, pp. 40-45.

<sup>94</sup> Huerga, 1991, pp. XXV-XXVI.

<sup>95</sup> Huerga, 1991, pp. XXIV-XXV.

<sup>96</sup> Huerga, 1991, pp. XXVI.

のであった。つまりウエルガは既存の知識を援用しているに過ぎない。すでに述べたように、彼の独創性はそれらを組み合わせる形での聖書解釈の方法を、大学教育において実践した点に見出されるべきであろう。1550年代にウエルガが実践した手法は、スペインにおいて神学教育の新たな方向性を示し、その遺産は彼の薫陶を受けたアリアス・モンタノやフライ・ルイス・デ・レオンによって引き継がれてゆく。

## 5. むすびにかえて

Filología poligráfica なる用語をもってシプリアーノ・デ・ラ・ウエルガの聖書解釈を形容したのは、ガルパール・モロチョ・ガヨであった<sup>97</sup>。彼はその意味するところを、ウエルガと同じくシトー会士であったフェルミン・イベロの、次のように言葉とともに紹介している。

彼の手法は実り豊かなるものとして評価することができよう。それはあらゆる学問、芸術、言語の知識で満たされており、それゆえ彼の記したものには神学、哲学、数学、文学、天文学に関するテーマを見出すことができる。加えてヘブライ語、カルデア語、ギリシャ語、ラテン語に関する知識は、そのすべてが学理に基づきしかるべく整理されている。<sup>98</sup>

アルカラ大学で実施された神学における聖書研究は、ウエルガによってひとつの形を得る。その成果の一端は、1549年にルーヴェンで出版された詩篇の注釈や、それにつづいて著された雅歌などに関する複数の注釈として世に問われた。ただしこうした書の中には出版に際して異端審問所から疑義が呈されたものもあった。ヨブ記の注釈などは、ウエルガ没後の1612年に禁書に指定されている。

新たな神学を目指し、シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガに代表される釈義の方法を実践するに至ったアルカラ大学でも、対抗宗教改革の時代を迎えると、神学教育の方向性を修正することになる。1545年、アルカラ大学の神学部教授となったメルチョール・カノは、同大学におけるトマス主義の復権を主導してゆく<sup>99</sup>。16世紀の後半になると、スペインの大学教育としての神学はスコラ学

<sup>97</sup> Fernández López, 2009, p. 119.

<sup>98</sup> Morocho Gayo, 1991, p. 897.

拙訳で、原文は以下の通り。

Puede apreciarse que su estilo es fecundo, ya que están repletos de conocimientos de todas las ciencias, artes y lenguas; de tal manera que en sus escritos se hallan temas de teología, filosofía, matemáticas, poesías, astronomía. Y en su conocimiento de las lenguas hebrea, caldea, griega y latina, todas las piezas están sabiamente ajustadas

<sup>99</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 169.

の復活を見ることになる。いわゆるサラマンカ学派と呼ばれるものが形成され、この分野においてアルカラ大学はサラマンカ大学の影響下に入り、シスネロスが標榜した神学の在り方は過去のものとなってゆく<sup>100</sup>。その一方で、サラマンカ学派を代表するドミンゴ・デ・ソトやメルチョール・カノといった人物が、アルカラ大学においてその学究を行っていた点も忘れるべきではないだろう。アルカラ大学における開かれた学問的土壌が、彼らの思想の胚胎に影響を与えたともされている<sup>101</sup>。

いずれにしろ、異教の英知を包摂する神学を目指したシプリアーノ・デ・ラ・ウエルガ等は、厳しい時代を迎えることとなった。1559年、バリャドリッドで異端審問所による大規模な焚刑が実施されるなど宗教的な不寛容さが時代の趨勢となり、ウエルガも尋問の対象になったとされる。その翌年の1560年、ウエルガはアルカラ・デ・エナーレスで没している。

アルフォンソ・デ・サモラがもたらしたユダヤ教の知的遺産や、シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガが実践した聖書解釈の方法は、後者の弟子であるアリアス・モンタノやフライ・ルイス・デ・レオン等によって継承されてゆく。同時期にアルカラ大学で学んだ二人は、生涯にわたって親交を深めている。王室礼拝堂の司祭であったアリアス・モンタノは、司書としてエル・エスコリアル宮の図書館を管理し、同宮殿においてヘブライ語なども講じている。また古代の言語に関する該博な知識を駆使し、アントワープ版多言語対照聖書の編纂事業に従事したことはよく知られている。ルイス・デ・レオンもサラマンカ大学において学者として栄達を遂げるが、その一方でウエルガと同じく異端の嫌疑をかけられ、1572年から1576年まで審問のために投獄されている<sup>102</sup>。そのきっかけとなったのが、彼の師も携わった雅歌の釈義をめぐる問題であった。

雅歌の釈義のほか、フライ・ルイス・デ・レオンの主著の一つである『キリストの御名について』でも、シプリアーノ・デ・ラ・ウエルガの *Filología poligráfica* と同様の手法を見ることができる。ヘブライ語の原文の意味を詳述するとともに、諸学の知識を駆使してキリストに付与された名前の意味を広範な視点で語るその姿勢には、師のそれと共通する点があると言えるだろう<sup>103</sup>。その一方で、同書が俗語であるスペイン語で著されたことは、革新的な一歩でもあった。神学の問題を俗語で著すことはある種のタブーを破ることであり、その影響はラテン語の書とは大きく異なる。ルイス・デ・レオンが訴追されるきっかけと

<sup>100</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, p. 169.

<sup>101</sup> *Historia de la Universidad de Alcalá*, 2010, pp. 526-531.

<sup>102</sup> León, 2003, p. 12.

<sup>103</sup> 野村, 2011 参照.

なった前述の雅歌の積義の問題も、ラテン語での出版ならば容認しうるものであったとされる<sup>104</sup>。

フライ・ルイス・デ・レオンがそうした書を俗語で著した意義と動機については稿を改めて検討したいが、それがシスネロスの理念が生んだアルカラ大学の学問的営為を継承するとともに、大学という枠組みをこえた新たな試みであったことは間違いないであろう。

---

<sup>104</sup> León, 2003, p. 18.

## 参考文献

- 岡本信照 (2015) 「第 2 章 黄金世紀文学隆盛の基盤としての俗語擁護論」、『スペイン・ルネサンス思想研究における文献学的実証分析』(平成 24-26 年度科学研究費補助金研究成果報告書)
- 川成洋・坂東省次 [編] (2011) 『スペイン文化事典』 東京: 丸善株式会社  
『聖書 (新改訳)』 (1986) 東京: 日本聖書刊行会
- 野村竜仁 (2011) 『『キリストの御名について』とユダヤ的諸相に関する一考察』、  
神戸市外国語大学研究会神戸外大論叢第 62 巻第 4 号
- 山本伸一 (2015) 『総説カバラー : ユダヤ神秘主義の真相と歴史』 東京: 原書房
- 山本義隆 (2007) 『一六世紀文化革命 2』 東京: みすず書房
- Bataillon, Marcel (1982). *Erasmus y España*, México: Fondo de Cultura Económica.
- Fernández López, Sergio (2009). *El "Cantar de los cantares" en el humanismo español: la tradición judía*, Huelva: Universidad de Huelva.
- Gil García, Ángel (2003). *La Universidad de Alcalá de Henares en el siglo XVII, según los datos de sus visitas y reformas*, Alcalá de Henares: Fundación Colegio del Rey.
- González Navarro, Ramón (1999). *Felipe II y las reformas constitucionales de la universidad de Alcalá de Henares*, Madrid: Sociedad Estatal para la Conmemoración de los Centenarios de Felipe II y Carlos V.
- Huerga, Cipriano de la (1991). *Comentario al Cantar de los cantares*, Obras Completas V, León: Secretariado de Publicaciones de la Universidad de León.
- León, Luis de (2003). *El Cantar de los Cantares de Salomón*, Madrid: Ediciones Cátedra.
- Morocho Gayo, Gaspar (1991). «Humanismo y Filología poligráfica en Cipriano de la Huerga. Su encuentro con fray Luis de León», *Ciudad de Dios: Revista agustiniana*, Vol. 204, Núm. 2-3.
- Perea Siller, Francisco Javier (2013). «Los inicios de la cábala humanista en Alcalá: Alfonso de Zamora y Cipriano de la Huerga», *Helmantica: Revista de filología clásica y hebrea*, Tomo 64, Núm. 191.
- Pérez, Joseph (1986). «El erasmismo y las corrientes espirituales afines», *El erasmismo en España*, Santander: Sociedad Menéndez Pelayo.
- , (2013). *Humanismo en el Renacimiento español*. Madrid: Gadir Editorial.
- Real Academia de la Historia (2009). *Diccionario biográfico español*, Tomo 13. Madrid: Real Academia de la Historia.

- Real Academia Española (2014). *Diccionario de la lengua española*, 23a ed., Madrid: Espasa Calpe.
- Ruiz García, Elisa (2011). *La casa de Protesilao : reconstrucción arqueológica del fondo cisneriano de la Biblioteca Histórica "Marqués de Valdecilla" (1496-1509)*, Madrid: Universidad Complutense.
- VV.AA., (1999). *Cisneros y el Siglo de Oro de la Universidad de Alcalá*. Madrid: Mateu Cromo.
- , (2002). *Erasmus en España*. Madrid: Sociedad Estatal para la Acción Cultural Exterior.
- , (2010). *Historia de la Universidad de Alcalá*. Alcalá de Henares: Servicio de Publicaciones de la Universidad de Alcalá.
- Wirszubski, Chaim (1989). *Pico della Mirandola's encounter with Jewish mysticism*, Cambridge: Harvard University Press.

Keywords: スペイン ルネサンス 枢機卿シスネロス アルカラ大学